

意見陳述書

平成28年11月8日

長崎地方裁判所 御中

中 島 正 徳

「何のために生まれてきたのか」。苦しんで死んでいった妹たちを見て、私は思いました。

私は、原告の中島正徳です。被爆当時、15歳でした。丸尾町の三菱電機の工場で被爆しました。被爆後、自宅の城山町に向かいました。町が火の海だったので、稲佐山中腹を越えました。煙の中、遺体につまずくなどして、何回も転倒しながら、やっとの思いで、梁川橋に着きました。頭がない遺体。内蔵が口から飛び出している遺体、橋の上には、黒焦げた遺体が無数に散乱していました。この世の光景とは思えませんでした。三菱製鋼の工場はアメのように曲がり、煙の中から助けを求める悲鳴が哀れに聞こえました。私にはどうすることもできませんでした。私は、石垣をつたって浦上川へ

入りました。干潮で、川の干潟には黒焦げた遺体が積み重なっていました。苦しまぎれに水を目指し、水に届かず、ここが死に場所とばかりに折り重なっていました。私は、川の流れに腰まで入って上流へ向かいました。次の竹岩橋は、真ん中から折れて落ちていました。遺体は、さらに上流へ続いていました。城山で石段を登り、道路に出ました。空き地に三菱製鋼の鉄屑が高く積んでありました。鉄屑がまるで溶鉱炉のように真っ赤に焼けていました。城山小学校の校舎は大破し、運動場には遺体が散乱していました。防空壕には負傷者が溢れていました。我が家まで200メートル。畑には緑の葉は一枚もなく、赤茶けた土の上にはカボチャと人の遺体が散乱していました。

我が家の跡に近づくと、父が大火傷を負って勤め先から帰っていました。足下には、母と5歳の弟の黒焦げた遺体がありました。13歳の妹、9歳の妹、2歳の弟は、瀕死の重傷で自宅の防空壕に寝かせてありました。私は、夕方から木片を集め、母と弟の遺体を自ら火葬しました。寝ず、食わずで30時間かかりました。重症の3人は、14日に息を引き取

りました。「何のために生まれてきたのか，原爆のモルモットになるために生まれたのか！！」。私は，無念の思いで心の中で呟きました。

日本人として生まれた者は，国に忠誠を誓い，一旦緩急あるときは，天皇陛下に命を捧げよと，小学校1年生へ入学と同時に，徹底的に強制教育を受けて参りました。小学校5年生の時に，護国神社建設の敷地造成土木工事に，6年生のときには金比羅山の高射砲陣地構築の土木工事に動員されるなど，人命を軽視し，権力者の暴走によって第2次世界大戦へ突入しました。その結果，歴史上過去に類を見ない未曾有の戦争犠牲者を出した挙げ句，敗戦しました。列島は廢墟と化し，食べる物もなく，住む家もなく，これが人間の生活かと思うほど貧しい暮らしに耐え，平和憲法を糧にして歯を食いしばり，血のにじむ思いで今日の日本を再建して参りました。

戦後71年。戦争の愚かさを知る国民が少なくなった今，この時とばかりに，権力者安倍総理は，国の防衛と称して平和憲法をねじ曲げ，国民の意思を無視し，国会における数の

力を悪用し、安保法制を成立させました。世界のいたる所で戦闘をしているアメリカ軍の後続部隊と称して自衛隊の出勤準備を進めています。このままでは、日本は、多くの国を敵に回し、日本の平和憲法はマヤカシモノとものしられ、戦争へ発展することは火を見るよりも明らかです。二度と戦争はすまいという精神で、安保法制には絶対に反対します。